【札幌学院大学 2025 年度学生発案プロジェクト】 活動報告書

循環型6次産業の先端を行く「青空メロン」における広報戦略の実践

◆ ◇ ◆　目　次　◆ ◇ ◆

頁

はじめに　～プロジェクト立ち上げの経緯とねらい～……1
第1章　友夢牧場の会社概要とバイオマス発電でのメロン栽培……2
　第1節　友夢牧場の会社概要……2
　第2節　友夢牧場でのバイオマス発電……3
　第3節　友夢牧場でのメロン栽培……7
第2章　友夢牧場での実習と広報の提案……13
　第1節　実習レポート……13
　第2節　実習のまとめ……18
　第3節　実習をふまえた広報の提案……22
第3章　友夢牧場の SDGs と広報の方向性……27
　第1節　SDGs の思想と友夢牧場……27
　第2節　SDGs を軸とした広報の方向性……33
むすび……38

《 プロジェクトメンバー 》

氏　　名	所属学部学科　学年	学籍番号
倉科　凛 （プロジェクトリーダー）	経済経営学部経営学科　2年	Q241062
前中　琉宇	経済経営学部経営学科　2年	Q241666
鎌田　雄大	経済経営学部経営学科　2年	Q241046
渕野　剛生	経済経営学部経営学科　2年	Q240287
中村　侑一郎	経済経営学部経済学科　2年	G241406

はじめに　～プロジェクト立ち上げの経緯とねらい～

2025 年 4 月 24 日に「札幌学院大学 学生発案プロジェクト」の募集要項が、学内で発表された。そのプロジェクトの目的は以下のとおりである。

本学の目的(学則第 1 条|「北海道の産業の発展及び北海道の社会文化並びに道民の福祉の向上に貢献し得る人材を育成することを目的とする。」)、理念(「自律」、「人権」、「共生」、「協働」)及び札幌文科専門学院の建学の精神(「学の自由」、「独創的研鑽」、「個性の尊重」)に合致する学生が中心になって構想、計画する学生発案のプロジェクトを支援する。

この公募に対して、プロジェクトメンバーはそれぞれ意見を出し合いながら、下の内容で応募することにした。なお、本プロジェクトのねらいは、下の【プロジェクトの目的】に示した内容となる。

【プロジェクトのきっかけ】

・経済経営学部のカリキュラムでは、SDGs や地方再生、農林業の 6 次産業化を扱う科目やゼミナールが数多くある。その学びをより深く吸収できる事例を探していたところ、エネルギーの地産地消や循環型農業など先進的な農業を行っている友夢牧場に到達した。価値観を共有できる仲間が集まり、プロジェクトへの取り組みを検討するようになった。

【プロジェクトの目的】

・友夢牧場は、エネルギーの地産地消や循環型農業などに邁進し、先進的な農業であるというだけでなく、循環型であるために商品開発、商品販売に取り組まれている。その事業展開に若者の価値観や発想をベースにした広報戦略を提案し、Z 世代が成長するプロセスでの「青空メロン」の普及の一助になれるように頑張りたい。

【期待される効果】

・現地での体験を通して、酪農や農業の大変さ、やりがい、働くという事の本質を学びたい。
・自分たちが研究活動を行う過程や結果で、「青空メロン」という商品と会社の現代社会での存在価値を多くの人に認知してもらいたい。
・報告書や報告会を通して、SDGs や地方再生などの大学での学びが、実際にはどのような展開や努力があるのかを多くの学生に知ってもらいたい。また自ら実践することで、「学習」は「学修」になるのではないかと伝えたい。

以上の応募内容についてのプレゼンテーションや面接を経て、2025 年 7 月 14 日に、「採択」の通知があり、プロジェクトを始動することとなった。

【執筆担当:倉科 凛】

第1章　友夢牧場の会社概要とバイオマス発電でのメロン栽培

第1節　友夢牧場の会社概要

(1)友夢牧場の歩み

友夢牧場の歴史は、2000(平成 12)年に、新得町内の酪農家 3 戸・畑作農家 1 戸・酪農ヘルパー1 戸が集まった「有限会社 友夢牧場」の設立から始まる。

2001(平成 13)年に 624 床の牛舎で創業を開始し、2009(平成 21)年には 312 床の牛舎を増築し、新たに哺育舎を建設した。さらに 2013(平成 25)年には、120 床の牛舎を増築している。

2016(平成 28)年には、地域での先駆けとなる、牛舎から排出されるメタンガスを利用したバイオガス発電事業を開始した。翌 2017(平成 29)年に、バイオガス発電にて発生する排熱の利用方法として、農作物のハウス栽培を検討し、町田市の水耕栽培メロン施設を視察している。

2018(平成 30)年には、町田市の水耕栽培メロン技術を導入し、道内では初めての試みとなる水耕栽培メロンに取り組んだ。翌年の 2019(平成 31)年には、本格的な水耕栽培メロン事業を開始し、販路開拓、ブランディングなど水耕栽培技術の向上と共に各方面への活動を行うようになった。

(2)友夢牧場の企業理念と行動指針

社名の由来は、設立当初のメンバーの頭文字である Y・Y・U・M　をユウムと読み、それを漢字で『友夢』と命名した。そこには、「仲間達と共に夢を育み、酪農の無限大の可能性を楽しく追究していこう」、「幅広い角度から地域や社会の発展に貢献していこう」という想いが込められている。

企業理念は「『友』と『夢』を共に育み地域社会に貢献する。～酪農！無限大の可能性を楽しむ～」であり、行動指針は「牛にも人にも環境に優しく牧場と人の持つ力を最大限発揮する。常にお互い様の気持ちで助け合う。『縁の下』の力持ち的な存在となる。」を表明している。

この企業理念と行動指針の下で、「酪農体験」や「インターンシップ」も実施している。特に酪農体験は「酪農教育ファーム」の認証を受けた活動の一環である。

また、「企業の社会的責任」である CSR（Corporate Social Responsibility…環境、社会、従業員、株主などのステークホルダーへ配慮し、自らの影響に責任を持つ）としては、われわれが本プロジェクトで学ぶ、「牧場から出る廃棄物を利用したバイオガス発電事業と、バイオガス発電の余剰熱を利用したハウス栽培」を行っている。

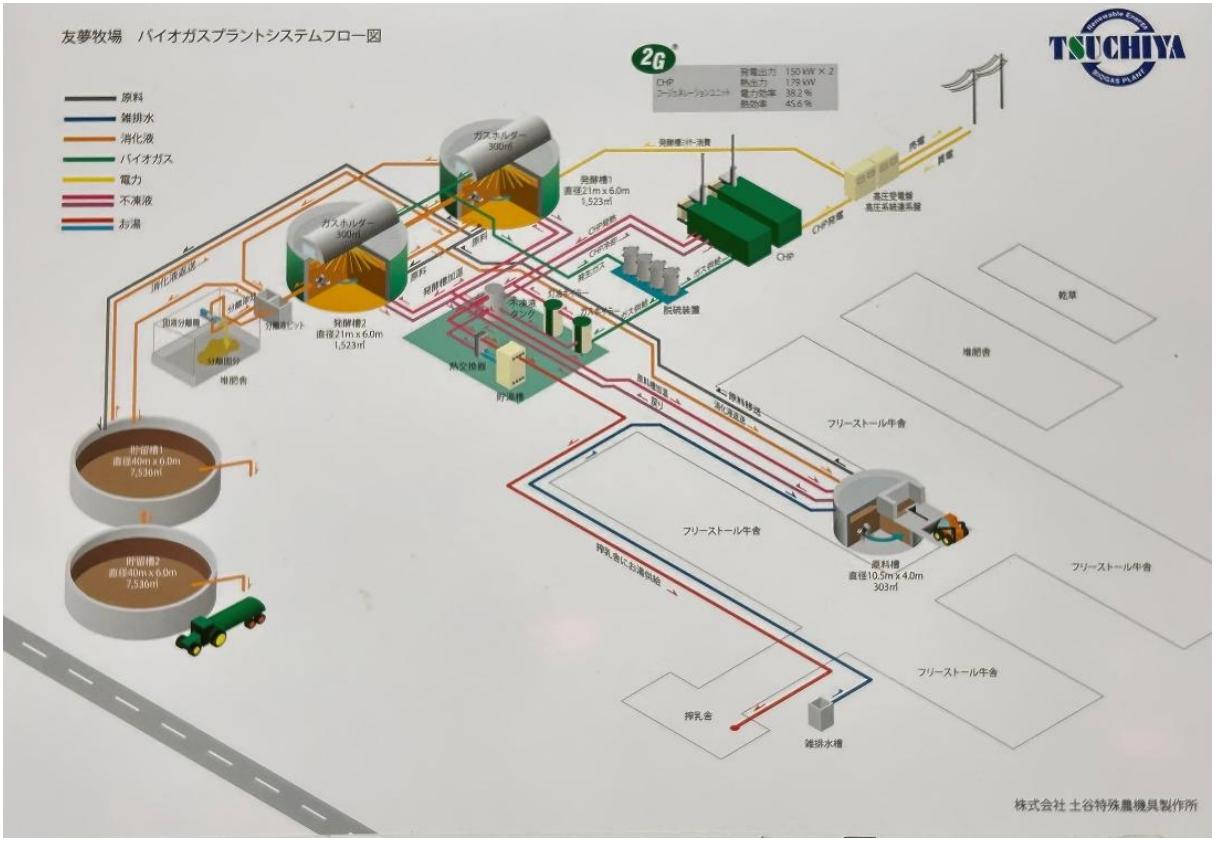
(出所：https://www.yuumu.jp/)

第2節　友夢牧場でのバイオマス発電

酪農経営において日常的に発生する牛のふん尿は、処理に多くの手間とコストを要する存在である。通常、酪農家は、ふん尿を堆肥として自家の畑に施用したり、近隣の耕種農家へ引き取ってもらったりすることで肥料として活用している。しかし、飼育頭数が増加すればするほど、ふん尿の発生量も比例して増え、処理量は膨大なものとなる。その結果、臭気問題や保管場所の確保、散布作業にかかる労力など、経営上の負担は決して小さくない。特に北海道のような酪農が大規模化しやすい地域では、1戸あたりの飼育頭数が多く、ふん尿処理は常に課題として存在してきた。環境規制の強化や周辺住民への配慮が求められる中で、単に「処理する」だけでなく、「いかに価値ある形で活用するか」が、現代の酪農経営において重要な視点となっている。

友夢牧場では、こうしたふん尿処理の課題を単なる「負担」や「コスト」として捉えるのではなく、「資源」として最大限に活用する発想のもと、バイオマス発電を中心とした循環型の仕組みを構築している。牧場では約1,000頭の牛を飼育しており、牛1頭あたり1日に排出されるふん尿は約35リットルとされている。そのため、1日に回収されるふん尿の量は約35,000リットル、重量にしておよそ3.5トンにも達する。この莫大な量のふん尿を安定的かつ継続的に処理することが、バイオマス発電の基盤となっている。

《友夢牧場のバイオガスプラントシステムのフロー図》



（出所：友夢牧場の提供資料）

回収されたふん尿は、まず攪拌機によって十分に混ぜ合わされる。この工程では、ふん尿を液状化し、固形分と水分が均一に混ざった状態を作り出すことが目的である。発酵を効率的に進めるためには、原料の状態をできるだけ均質に保つことが重要であり、攪拌はその前提条件となる。もし固形分が偏った状態で発酵槽に投入されると、発酵の進み方にムラが生じ、ガス発生量の低下や設備への負担増加につながる恐れがある。攪拌されたふん尿は、次に発酵槽へと送られる。発酵槽内は酸素を遮断した嫌気的な環境が保たれており、その中で微生物が有機物を分解することで発酵が進行する。この過程で生成されるのがメタンガスである。友夢牧場では、発酵槽を二基設置し、常にフル稼働の状態で運転している。発酵槽を複数設けることで、処理能力の安定化やメンテナンス時のリスク分散が図られており、大規模牧場ならではの工夫が見られる。

《発酵槽から見えるメタンガス》





（出所：友夢牧場での実習時の撮影写真。以下、特に出所の説明の無いものは実習時の撮影写真である）

《回収された酸化鉄》



発酵の過程では、メタンガスと同時に硫化水素も発生する。硫化水素は強い腐食性と悪臭を持ち、そのままでは発電設備の故障や安全面でのリスクを引き起こす可能性がある。そのため、ガスを発電に利用する前に、硫化水素を確実に除去する工程が不可欠である。友夢牧場では、酸化鉄を用いた硫化水素除去装置を導入しており、酸化鉄がフィルターの役割を果たすことで硫化水素を吸着・除去している。この装置は特許技術に基づくものであり、ガスの品質を安定させ、安全な発電運転を支えている。

使用済みの酸化鉄は、約３か月に１回の頻度で交換されるが、ここでも「廃棄」という選択は取られていない。硫化水素を吸着した後の酸化鉄は、畑に散布することで土壌改良材として再利用されて

おり、資源循環の一部として組み込まれている。このように、バイオマス発電の各工程において、可能な限り廃棄物を出さない仕組みが構築されている点が、友夢牧場の特徴である。硫化水素が除去されたメタンガスは、ガスエンジン式の発電設備へと送られる。友夢牧場には 150kW の発電機が二基設置されており、牧場規模としては非常に高い発電能力を有している。発電された電力は、搾乳設備や牧場内の各種機器の稼働に利用されるほか、余剰分は売電されている。発電量は 1 日あたりで約 1,000 世帯分の電力使用量に相当するとされており、地域エネルギー供給の一端を担っているといえる。

《脱硫装置》



友夢牧場のバイオマス発電の特徴は、単に電力を生み出している点にとどまらない。むしろ重要なのは、発電時に必ず発生する「排熱」を積極的に活用している点である。一般的な発電では、排熱は大気中に放出されることが多いが、友夢牧場ではこの熱エネルギーを無駄にせず、農業生産へと再利用している。具体的には、発電設備から発生する排熱を回収し、メロン栽培用のハウス暖房として利用している。北海道は冬季の寒さが厳しく、農業生産においては暖房コストが大きな負担となる地域である。特にメロンは温度管理が品質や糖度に直結する作物であり、一定の温度を安定して保つことが求められる。そのため、多くの生産者は重油やガスといった化石燃料に依存した暖房を行ってきた。友夢牧場では、バイオマス発電の排熱を暖房に利用することで、こうした外部エネルギーへの依存を大幅に抑えている。排熱は安定的に供給されるため、ハウス内の温度変動が小さくなり、昼夜や天候による影響を受けにくい栽培環境が実現されている。その結果、メロンの生育が均一になり、収穫時期や品質のばらつきが抑えられるという効果が生まれている。さらに、排熱利用による暖房は、燃料費削減という経済的なメリットだけでなく、環境負荷の低減にも寄与している。化石燃料の使用量が減ることで、二酸化炭素排出量の削減に

つながり、持続可能な農業の実践にも貢献している。メロン栽培は、こうした循環型システムの中で位置づけられた農業生産であり、エネルギーと農業が密接に結びついた象徴的な存在といえる。

《ハウス内の温度計》



《《排熱を利用したメロン栽培》



発酵後のふん尿は、そのまま廃棄されることはなく、「小粋分離場」において固形分と液体分に分けられる。液体分は液肥として利用され、耕種農家に委託して栽培しているデントコーンの圃場などに施用されている。デントコーンは飼料作物として再び酪農に利用されるため、ここでも資源循環の輪が形成されている。

《固液分離機》



《固液分離機から生まれる肥料》



一方、固形分は堆肥として活用される。分離された固形分は集積された状態でも内部温度が 50～60 度に達し、さらに攪拌しながら下部から空気を送り込むことで乾燥が進み、温度は約 70 度まで上昇する。この高温状態によって病原菌や雑草種子が死滅し、安全で安定した堆肥が生産される。完成した堆肥は牧場内の牧草地や周辺農地で利用され、土壌改良や地力向上に役立てられている。

このように友夢牧場では、牛の飼育から生じるふん尿を出発点として、発酵、発電、排熱利用、肥料化へとつながる一連の流れが体系的に構築されている。バイオマス発電施設の整備には約 13 億円という多額の初期投資が必要であり、運転や維持管理にも継続的なコストがかかる。しかし、それ以上に、酪農経営とエネルギー生産、農業生産を結びつけた循環型の仕組みを確立している点に、大きな価値がある。 友夢牧場の取り組みは、酪農を基盤としながら新たな付加価値を生み出す第 6 次産業の具体例であり、環境負荷の低減と経営の安定化を同時に実現する先進的な実践であるといえる。ふん尿を「問題」としてではなく「資源」として捉える視点は、今後の日本の酪農・農業において、ますます重要性を増していくと考えられる。

（出所：友夢牧場の提供資料及び実習時の撮影写真）

【執筆担当：渕野 剛生】

第3節　友夢牧場でのメロン栽培

（1）メロン栽培での環境

友夢牧場内に飼われている牛の糞を集めて発酵させることで発生するメタンガスを利用して発電し、その発電過程で出る熱エネルギーを使い栽培している。また発電後に残った消化液と呼ばれる液体は良質な肥料として使うことができ、畑に撒くことで循環型農業を実現している。

メロンはビニールハウスで栽培されており、その日の天候や気温によってビニールハウス内の温度、湿度を細かく変更している。変更方法としてビニールハウスの側窓と呼ばれる側面を開閉させることで温度、湿度を変えることができる。

《ビニールハウス内の様子》



《メロン栽培の様子》

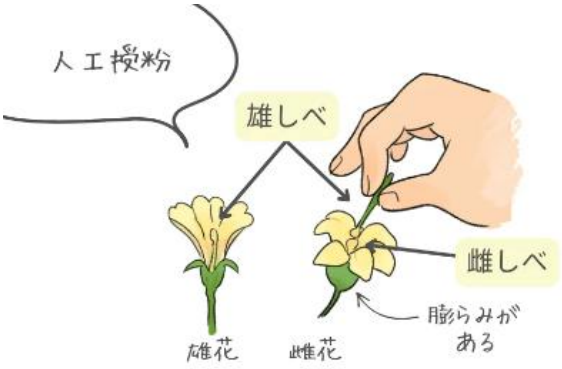


（2）メロン栽培のプロセス

①受粉

メロンを作るにはまず、雄花と雌花を見つけ、雄花についている雄しべを綺麗に切り取り、雌花の雌しべにこすりつけることで受粉させる人口受粉を行っている。自然受粉と人口受粉の違いについては、自然受粉は自然界における植物の受粉のプロセスで、昆虫、鳥、風などによって花粉が運ばれる。対して、人工受粉は人の手を借りて花粉を雌花につける方法だ。メロン栽培では、受粉率を高めるため、また天候や昆虫の状況に左右されないように、人工受粉が広く行われている。この作業は丁寧さとタイミングが求められる。メロンの品質や収穫量を向上させるために、人工受粉は非常に有効な手段となっていて、自然受粉と比較して、労力は必要となるものの、より制御された環境下で受粉を促進することができるのが大きな利点となっている。

《人工授粉の方法》



（出所：https://shizengurashi.jp/blogs/method/melon）

各植物には花粉が最も活発に飛散する時期があり、これが人工受粉に最適なタイミングである。一般的に、気温が安定し、湿度の高くない乾燥した日が適している。早朝から午前中にかけて花粉がもっとも活性化する時間帯なので、この時間帯に作業を行うのが効果的。また、強い風や雨の日は避けるべきで、花粉の飛散が不規則になり、受粉の効率が大幅に低下する可能性がある。気候条件にも注意し、最適な受粉環境を整えることが重要となる。

人工受粉がうまくいったかどうかは、花の後の成長に現れる。何日か経った後、果実が成長し始めるのが最も確かなサインだ。しかし、受粉が成功していても、外的要因によって果実が育たない場合もあるので、注意が必要である。人工受粉後は定期的な水やりや適切な日当たりを保ち、環境を整えることと、病気や害虫の予防にも注意を払わなければならない。受粉から果実が育つまで、植物の健康を保ち続けることが肝心で、適切なケアが受粉成功のカギとなる。

②剪定

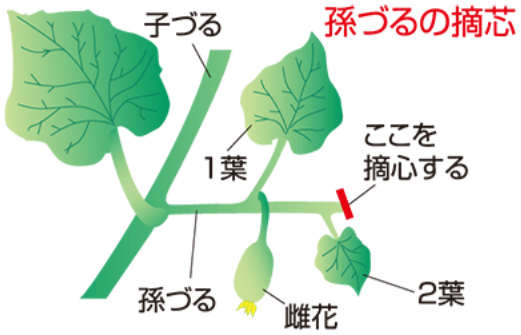
メロンの剪定とは、「摘芯」と「整枝」、そして「摘果」の作業の総称で、不要なツルや葉、実を取り除き、残った大切な実へ栄養を集中させ、大きく甘いメロンを育てるための

栽培管理技術である。親づる・子づる・孫づるの発生する場所とタイミングを理解し、適切な節位（位置）でカットすることで、品質の高いメロンを収穫することである。

③摘芯

摘芯とは、茎の先端にある成長点（芽）を摘み取る作業のことである。主な目的は親づる（メインの茎）の成長をあえて止めることで、果実がつきやすい「子づる」や「孫づる」の発生を促し、株の栄養を果実に集中させることにある。メリットとしては品質が向上するだけでなく、伸ばすつるの数を制御することで、1株あたりの果実数をコントロールすることや、狭いスペースでも効率よく育てられることも挙げられる。

《摘芯の方法》



（出所：https://hcvalor-navi.com/gardening/kasai/melon/tebiki）

④整枝

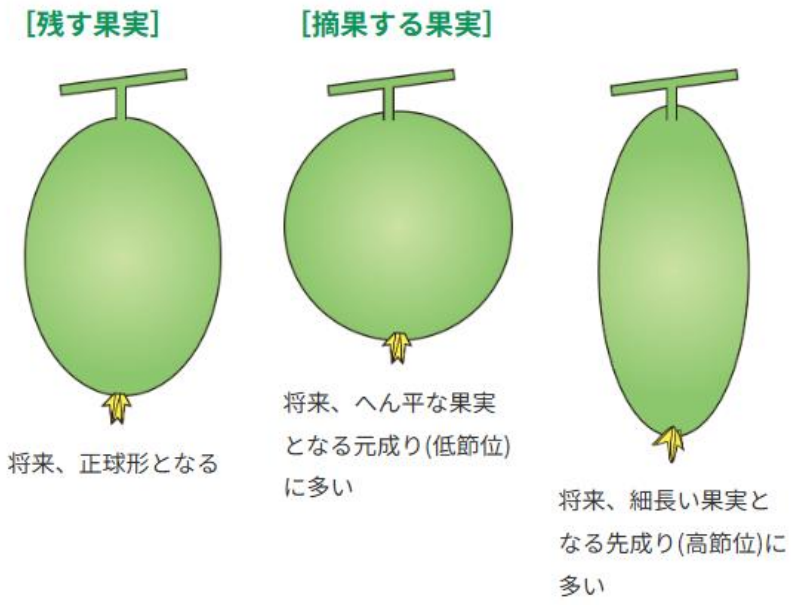
整枝はメロンの実に必要な葉やつる、花だけを残し、必要のない葉やつる、花を綺麗に摘み取ることだ。この作業はとても難しく、整枝作業を行う時期のメロンの苗は繊細で、力加減を間違えると苗ごと潰してしまう可能性がある。整枝のメリットとして1つ目は雌花の着生を促進し、確実に収穫できることだ。メロンは「親づる」よりも「子づる」、さらに「孫づる」に雌花（実になる花）がつきやすいという性質を持っている。整枝によってあえて親づるの成長を止め、雌花が咲きやすい孫づるの発生を促すことで、収穫量を安定させることができる。2つ目は果実の品質（糖度・大きさ）を向上させることだ。放任して育てると、栄養が多くの枝や葉に分散してしまい、一つひとつの実が小さく、甘みも足りなくなる。そのため不要な枝を切り落とすことで、光合成で作った栄養を特定の果実だけに集中させ、大きく甘いメロンに仕上げることが可能になる。また、実の数を制限することで、網目メロンの場合は網目の入り方が綺麗になり、形も整えることができるようになる。

⑤摘果

摘果とは、幼果を間引いて残った果実に十分な養分を行き渡らせる栽培管理の方法で、大玉化と高糖度という高品質なメロンを作るためには、欠かせない作業である。交配後の6～8日頃が適していて、このタイミングを逃すと、摘果する果実にも養分が配分されてしまい、結果として果実の質が下がってしまう。間引いたメロンは摘果メロンとして食用にできるが、生食には適していなく、漬物として多く使われている。

摘果する果実の目安は下図のようになっている。

《メロンの摘果の見極め》



（出所：https://www.takii.co.jp/umauma/manual/melon/index.html

⑥傘掛け

大きくなったメロンには傘掛けという作業を行う。これはメロンの実に新聞紙などで傘を作り、直射日光による日焼けや傷を防ぎ、高級感のある白い果肉と美しい網目を作るための栽培技術である。やり方としては新聞紙に切れ込みを入れ、へたに切れ込みを合わせてから傘状に丸めて果実上部を覆いホチキスで止めることでできる。

《友夢牧場でのメロンの傘掛け》





⑦収穫

メロンの収穫時期の目安は、人工授粉を行ってから 50～60 日ほどが目安となる。収穫適期となったメロンは、着果している枝の葉が枯れ始め、ヘタ部分までネットが広がり全体が白っぽくなる香りが強くなる、果実を軽くたたくと低い音がする、つるからメロンが外れやすくなるというのも収穫のサインである。メロンの収穫方法は、ハサミでツルを切って収穫する。早すぎる収穫は糖度不足につながり、遅すぎると果肉が水っぽくなるので収穫タイミングの見極めが重要になる。

見極めポイント	説明
ツルの様子	ツルが**コルク状に茶色くなり、自然に枯れ始める頃**
香り	甘い香りが**果皮のつるの周辺から感じられるようになる頃**
皮の色	**つけ根の色が薄くなったら、やや黄みがかってきたら**（マスクメロン、ノーネット種など）
おしりの弾力	果実の**底（おしり）を押してほんのり柔らかければ食べごろが近い**
ネットの張り具合	網目模様が**はっきり盛り上がってくると完熟に近い**

なお、収穫までの過程で下図のような病気が発生することがある。



（出所：https://www.takii.co.jp/tsk/bugs/ama/bug/）

(3)友夢牧場のメロン栽培の特徴

友夢牧場のメロンは、「青空メロン」と称し、インターネットでも販売している。その青空メロンの特徴を、次のように広報しているので紹介している。

新得町は、アイヌ民族の言葉で「カムイミンタラ（神々の遊ぶ庭)」とも呼ばれる大雪山系の麓にあり、豊かな自然に恵まれた町。

そんな友夢牧場がプロデュースする『青空®メロン』は、北海道初の水耕栽培メロンです。

十勝の厳冬期でも栽培可能なハウス栽培であり、その熱源にはバイオガスプラントの余剰熱を利用するなど SDGs に配慮した取り組みを行なっています。

十勝ならではの寒暖差と豊富な水資源を利用して育てた、特別なメロン。
農薬不使用のため、どなたにも安心してお召し上がりいただけます。

(出所: https://yuumu.theshop.jp/about)

青空メロンの特徴の一つは、秋に収穫できるところである。通常のメロンの収穫時期は夏が多いが、青空メロンは秋である。これはバイオマス発電による熱エネルギーがあるからこそ可能であり、秋のメロンとして販売できることが強みでもある。

《夏でもまだ若い友夢牧場のメロン》



青空メロンは、インターネットと新得町内で販売されている。ネットでは 1 万円を超えるものが多く販売されているが、2024 年 5 月 20 日に販売が終了している。新得町内では道の駅で販売予定である。現状では、流通量が少なく、生産個数を増やすことが今後の課題だと思われる。

【執筆担当:中村 侑一郎】

第2章　友夢牧場での実習と広報の提案

第1節　実習レポート

《実習1日目 2025 年10月14日》

期待と緊張が入り混じる中、私たちは 5 人で新札幌駅から特急に乗り込み、新得町へと向かった。駅に降り立った瞬間、札幌とは明らかに違う厳しい寒さに身が引き締まる思いがしたが、休む間もなく拠点となる友夢牧場へと向かった。



初めて訪れた牧場は、想像以上に生命力と「新鮮さ」に溢れており、これからこの場所で「青空メロン」の広報に携わるのだという実感が湧いてきた。取締役専務である湯浅さんとの面談で今後の活動に向けた志を説明した後、私たちは 5 人それぞれが現場の最前線へと飛び込んだ。分娩補助、搾乳、哺育、さらには牛追いなど、酪農の根幹を成す業務を体験したが、間近で見る牛の大きさは想像を遥かに超え、その迫力に圧倒された。



慣れない手つきで作業を進める中で痛感したのは、生き物の命を預かることの計り知れない大変さである。途中、牛が脱走するという不測の事態にも見舞われ、一瞬の油断も許されない現場の厳しさを、身をもって知ることとなった。19 時過ぎにようやく一日の作業を終えたが、翌日の始業が午前 3 時であるという事実を知り、自分たちが酪農の大変さをいかに表面的な理解で捉えていたかを思い知らされた。

この過酷なスケジュールを日々積み重ねている酪農家の方々への深い尊敬を抱き、そして苦労を重ねている牧場の価値を、広報という形でしっかり伝えていかなければならないと強く決意した一日となった。

《友夢牧場の全景》



（出所：https://www.yuumu.jp/）

《実習２日目 2025 年10月15日》

２日目の実習は、まだ深夜と言える午前3時からスタートした。この日、最も過酷だったのは約 6 時間に及ぶ搾乳作業です。約 1000 頭もの牛を相手に、糞尿が飛び散る中で同じ動作を延々と繰り返す時間は、肉体的にも精神的にも限界を試されるものだった。あまりの過酷さに体調を崩しそうな不安がよぎり、正直に言えば「辞めたい」という思いが頭をかすめたが、周囲の方々の圧倒的な働きぶりを前に、弱音を吐くことは許されなかった。ただひたすらに、目の前の作業に食らいつくしかないという決意で午前を終えた。

午後は、ヨーネ病の全頭検査に伴う採血作業に従事した。牛舎から搾乳室へと牛を誘導し、時には牛に跨って採血を行うという作業は、全身が糞にまみれる過酷なものだった。特に困難を極めたのは、牛を搾乳

《学生の搾乳体験》



室へと向かわせる「牛追い」である。向かってくるかもしれない巨体を威嚇し、誘導する作業は、一歩間違えれば突進されるかもしれないという本能的な恐怖との戦いだった。

泥だらけ、糞まみれになりながら宿に戻った時、昨日の比ではない疲労感と共に、この過酷な現場を日々支えている人々の凄みを改めて突きつけられた。広報活動の準備という名目を超え、命と向き合うことの泥臭さと、その裏にある計り知れない苦労を全身で受け止めた、忘れられない一日となった。

《実習3日目 2025 年10月16日》

3 日目は、前日までの泥臭い現場作業から一転し、広報プロジェクトとしての本番を迎える一日となった。午前中は修学旅行生による酪農見学に同行したが、前日に自分たちが体験したあの過酷な現場を、学生たちが新鮮な驚きを持って見つめる姿が印象的だった。現場の「リアル」を肌で知った今、彼らに見えている景色と、その裏にある酪農家の方々の苦労の両方を理解できる自分たちの立ち位置に、広報としての責任を再確認した。

午後は、「マーケティング会議」を実施した。私たちのプロジェクト内容を詳しくプレゼンテーションした。これまでは酪農現場での実習が中心だったが、この会議を通じて、私たちが目指す広報活動のビジョンをメロン担当の方にも深く理解していただけたと感じた。生産の最前線にいる方々と目標を共有できたことで、単なる学生の提案に留まらない、牧場全体を巻き込んだ「青空メロン」のブランド構築に向けた大きな一歩を踏み出すことができた。

また、私たちがこれまで大学等の学問の場で積み重ねてきた知識を、実社会の現場へアウトプットする重要な一日でもあった。具体的には、友夢牧場の方々や広報担当の方を前に、私たちが考案した「地域マーケティング」のフレームワークや、効果的な「SNS マーケティング戦略」のノウハウについて詳しくお伝えできた。

単にアイデアを出すだけでなく、背景にあるマーケティング理論や戦略的な根拠を明示しながら説明を行い、それを受けた企業側の視点とすり合わせるための議論を重ねた。自分たちが学んできた知識が、実際のビジネスシーンにおいてどのように解釈され、活用され得るのかを直接確かめるプロセスは、非常に緊張感があったが、同時に大きな手応えを感じるものだった。

プロの視点を持つ方々と対等に意見を交わし、一つの戦略を練り上げていく過程を通じて、学問としての知識が「生きた戦略」へと変わっていく醍醐味を味わえた。大学での学びが社会の課題解決に貢献できる可能性を実感し、学生としての本分を果たすことができた、非常にやりがいのある協議となった。

《実習４日目 2025 年10月17日》

《友夢牧場の予熱利用ハウス》



４日目からは、いよいよ本プロジェクトの核心である「青空メロン」の栽培ハウスでの活動が本格的始まった。これまでの牛を相手にした力強く、時に命の危険を感じるほどの激しい作業とは対照的に、ここでの作業は非常に繊細で、指先ひとつの動きが成果を左右するような丁寧さが求められるものだった。

私たちは、メロンの花一つひとつに手作業で触れる受粉作業や、複雑に伸びるつるを整える作業、そして大きく育ってきた実を保護するための「傘かけ」など、普段目にすることのないメロン栽培の舞台裏を体験した。ハウスの中は外の寒さを忘れさせるほどの熱気に包まれており、その中で黙々と続く細かな手仕事の連続に、農業という営みの根気強さを改めて実感した。

酪農の現場で感じた「力強さ」と、ハウス栽培で知った「繊細さ」。この両極端ともいえる愛情が注がれているからこそ、この牧場の産物は特別なのだと肌で感じることができた。自分たちの手で直接メロンの成長に触れたことで、広報として伝えたい「商品への愛着」がより一層深まった一日となった。

《学生が実際に傘掛けを体験》





《実習5日目 2025 年10月18日》

5 日目は、友夢牧場の SNS 広告担当の方との直接的なミーティングから始まった。SNS マーケティングの最前線で活躍されているプロフェッショナルの方から、私たちが準備してきた運用案に対して専門的なアドバイスをいただくという、非常に贅沢で貴重な機会となった。

そこでは、本プロジェクトの根幹に触れる深い議論が行われた。「このプロジェクトは一体誰のために、何のために存在するのか」「最終的にどのような価値を届け、どうありたいのか」。そうした本質的な問いを受け、担当者の方と対話を重ねていった。

今後の方向性が明確になったことで、計画もより具体的で説得力のあるものへと進化した。具体的にどのようなターゲットに対し、どのタイミングで、どういった感情を揺さぶるコンテンツを届けていくのか。人々の心に深く浸透させ、拡散していくための「仕組み」と「アクションプラン」を詳細に詰めていった。

学生だけの視点では決して到達できなかった「戦略の深み」と「ビジネスとしての視座」を学ぶことができた。

《実習6日目 2025 年10月19日》

最終日となる 6 日目は、友夢牧場という一つの枠組みを超え、その活動を支える「地域全体」の繋がりを学ぶ一日となった。かつてメロンを卸していたという「トクトク」や、地域に根ざした「相馬商店」などのゆかりの地を巡る中で、友夢牧場が新得町や十勝という広いコミュニティに支えられ、共生している事実を改めて実感できた。

また、隣の清水町へも足を伸ばし、独特の飼育方法で高品質なソフトクリームを展開する牧場など、十勝管内にある多様な酪農のあり方を見学した。各地で独自の工夫を凝らす酪農家の方々の姿に触れ、この地域がいかに豊かな志に満ちているかを再発見する機会となった。

《清水町あすなろファーミングに訪れ現地でソフトクリームを頂いた》





この 6 日間を通じて、広報とは単に一つの商品を宣伝することではなく、その背景にある「地域の繋がり」や「作り手たちの想いの連鎖」を伝えることなのだと学ぶことができた。友夢牧場の「青空メロン」が持つ価値は、十勝の豊かな大地と地域の方々の支えがあってこそ。その深い文脈を広報という形で表現していく重要性を確信し、全日程を締めくくることができた。

【執筆担当:鎌田　雄大】

第2節　実習のまとめ

私たちは友夢牧場の仕事内容を 5 泊 6 日で体験してきた。これは現地での体験を通して、酪農や農業のやりがい、大変さ、働くという事の本質を学ぶということや、その企業の業務や雰囲気を知ったうえで広報したいと考えたからだ。

ここではプロジェクトメンバーの友夢牧場での体験を通した感想を述べたうえで、共通していた箇所や学び、今後への活用をまとめておく。

【プロジェクトメンバーそれぞれの感想】

倉科　今回の体験で酪農の大変さを痛感した。特に 19 時ごろまで業務を行った後に深夜の 3 時から業務開始というスケジュールには辛さを感じた。これには友夢牧場の従業員の方も「慣れるまではとても辛かった」と話していたため酪農や農業の登竜門だと感じた。また肉体労働がメインのため体調管理も大変だと感じた。メロンなどを育てるハウス作業ではハウス内の温度を逐一チェックしながら温風の機械を操作するなど自然との向き合い方に感銘を受けた。担当していただいた湯浅さんはじめ友夢牧場の方は、とても明るくキャラクターの濃い方ばかりで和気あいあいとしていて楽しさが伝染してきた。またベトナム従業員の方とも良好な関係を築いていた。

中村　メロンを栽培にあたって、天候に応じて動く必要があるため常にメロンのことを考えなければいけなく気を緩める時間がないところが大変だと感じた。また良いメロンを 1 個作るために摘心、傘かけなどの労力が必要のためメロンの値段が高い事にも納得できた。メロンの他にもコーヒー豆、シャインマスカット、バナナに取り組んでおり探求心や挑戦する気構え大事だと学んだ。その上、農業や酪農は一人一人の責任感がとても重要だと感じた。その他にも、水牛を多く飼育しているベトナムからたくさんの留学生が来ておりちょっとした国際交流ができ新しい経験になった。

渕野　ハウス内の温度は牛の糞尿をエネルギーとしており、バイオマス発電をするためであった。そのためにはメロンだけでなく酪農業とバイオマス発電の設備にまで力を注がなくてはいけなく、ただメロンを栽培するだけではない点が大変だと思った。

バイオマス発電を実現するためにはたくさんの機械が必要であり、それぞれとてつもない金額に驚愕した。またヨーネ菌を検査するために全頭検査を行ったり、搾乳の際には最初に牛乳の状態に異常がないかを一頭ずつ調べることや牛の足にテープを張ったりすることで牛の体調や怪我の箇所を全員が把握できる環境作りが徹底されていることに驚いた。

前中　友夢牧場のメロンは、水やりの量やタイミングがとても難しく、少なすぎても多すぎても品質が落ちると知り、管理の繊細さに想像以上の大変さを感じた。また生産者の努力と想いを知る貴重な経験になった。毎日、当たり前のように提供されているものも生産者があってこそのものだと身に染みて感じた。このありがたみは実際に経験したことから湧き出てくることだと思った。その他にも、子牛から成長していく過程を説明してもらった際や、分娩の際には非常にやりがいを感じた。大変なことも多いが、それ以上にやりがいを感じた。

鎌田　友夢牧場での体験を通じて、農業の概念が大きく覆された。単にメロンを育てるだけでなく、牛の糞尿などを使いバイオマスエネルギーに変えてハウスの温度を管理するという、酪農業と発電設備までを統合した巨大なサイクルに驚いた。生き物を育てる責任と、エネルギーを管理する技術がある。その両方を高い次元で両立させて初めて、青空メロンが生まれるのだと学んだ。どちらかが疎かになっては、実現しない事業であり友夢牧場だからこそ成すことができていると感じた。

【それぞれの感想から読み取れること】

上のそれぞれの感想から、6つの事項に分け、共通点・学び・今後への活用をまとめておく。

〈事項1〉農業・酪農の大変さについて…倉科・前中より

①共通点

今回の体験から農業・酪農は長時間かつ不規則な作業が多く、肉体的・精神的に非常に難しい仕事であると感じた。夜まで働いて、深夜から始まるシフトや、体力を要する業務が日常的である点において、その大変さを実感した。

②学び

現場では、業務の質を維持するためにも体調管理が重要である。疲労が溜まっている状態では安全面や作業効率にも影響が出ることを学んだ。また、厳しい環境（特に冬）でも業務を継続するためには、忍耐力と自己管理能力が不可欠だと感じた。

③今後への活用

今回の体験から学んだ自己管理の重要性を、今後の大学生活や将来の活動に活かしていきたいと感じた。日頃から体調管理をはじめとした「管理」を意識し、継続して物事に取り組姿勢を身に着けることで、困難な状況にも粘り強く対応できるよう努めたい。

〈事項２〉自然や生き物と向き合う責任の重さについて…渕野・中村より

①共通点

今回の体験から、農業及び酪農は生き物や自然を相手とする仕事であり、人の都合では成り立たない点に気づいていた。天候や気温、水やりの量やタイミング、牛の体調など、その日ごとに変化していくことに注意を払い、適切に対応するする必要がある。また、ちょっとした判断ミスや管理不足が、作物の品質低下や家畜の健康の悪化に繋がるため、一人一人の行動に大きな責任が伴う仕事であると認識した。

②学び

農業・酪農は単なる業務の積み重ねではなく、自然や生き物と向き合いながら「考えて行動する力」と「責任感」が求められる仕事であることを学んだ。特に、メロン栽培における繊細な環境管理や、牛の健康状態を全員で共有する仕組みから、人任せにせず、組織全体で責任を持つことの重要性を理解した。また美地上的に口にしている食べ物が、多くの管理と判断の上に成り立っていることを実感し、食の価値や生産者への理解が深まった。

③今後への活用

得た学びを、今後は物事に対する責任感や継続力として活かしていきたい。特に、目には見えない部分の努力や準備を怠らず、結果だけでなく過程を大切する姿勢を身に着けたいと思った。また、自然や相手の状況に応じて柔軟に対応する力は、農業分野に限らず将来の就職活動や社会生活においても必要不可欠である。今回の体験から、行動一つ一つに責任感を持ち取り組んでいきたい。

〈事項３〉生産物の価値と手間について…中村・前中より

①共通点

今回の体験から、生産物は簡単に完成する真野ではなく、多くの手間と時間、労力によって支えられていることを実感した。特に、メロンや牛乳といった身近な食品の裏側には、数多くの工程があることを理解した。

②学び

メロン栽培では摘心や傘かけなど細かな作業を丁寧に行う必要があり、酪農では牛の健康管理や検査が欠かせないことを学んだ。これらの工程を積み重ねることで品質の高い生産物が生まれることから、生産物の価格や価値には明確な理由があると理解した。

③今後への活用

今後は、日常生活において食べ物や物の価値を意識し、無駄を減らす行動を心がけた

い。また、生産者の努力を想像し、感謝の気持ちを持って消費する姿勢を大切にしていきたい。

〈事項４〉農業・酪農の総合性について…渕野・鎌田より

①共通点

友夢牧場の農業・酪農は、作物を育てる、牛を飼育するという独立した業務ではなく、設備管理やエネルギー供給など複数の分野が関わり合う総合的な産業であると感じた。どちらかが欠けては成り立つことはない循環型の産業という事に気づいた。

②学び

友夢牧場では、酪農とメロン栽培に加え、バイオマス発電を取り入れることでエネルギーを循環させており、環境や経営面にも配慮した取り組みが行われていた。このことから、一つの産業は多様な技術や知識の連携によって成り立っていることを学んだ。

③今後への活用

今後は物事を一つの視点だけから捉えるのではなく、全体を見渡して考える視点を大切にしていきたい。学校生活や将来の就職活動においても、広い視野を持って判断できるよう努めていきたい。

〈事項５〉人との繋がりとチームワークについて…倉科・中村より

①共通点

友夢牧場では従業員同士の連携が取れており、良好な人間関係が現場を支えていると感じた。また、外国人従業員とも協力しながら業務が進められている点が共通して印象に残った。

②学び

農業・酪農は個人作業ではなく、情報共有や協力によって成り立つ仕事であることを学んだ。互いに声を掛け合い、業務を分担することで、より安全で安定した作業が可能になると理解した。

③今後への活用

今後は、周囲とのコミュニケーションを大切にし、協力しながら物事に取り組む姿勢を意識していきたい。集団の中で自分の役割を果たすことや、自分というキャラクターを表現することを心がけたい。

〈事項６〉大変さ以上のやりがいと価値について…前中・鎌田より

①共通点

農業・酪農は大変な仕事である一方で、それ以上に大きなやりがいや達成感がある仕事であると感じた。

②学び

作物が育ち、生き物の成長を支えることは、人々の生活を支える重要な役割であり、そ

の責任と誇りがやりがいにつながっていることを学んだ。努力の積み重ねが成果として形に表れる仕事であると理解した。

③今後への活用

今後は、困難な状況でも目的意識を持ち、最後までやり遂げる姿勢を大切にしていきたい。努力の先にある成果を信じ、前向きに挑戦する気持ちを持ち続けたい。

今回の体験から、全員に共通していることは「現場を体験したからこそ価値観が変わった」という点である。例えば、「大変そう」や「辛そう」という思いが、具体的にどのように大変で、どのように辛いのかを体感できた。牛乳やメロンはただ提供されているのではなく、様々な設備や業務の仕組み、従業員の努力や責任が具現化されていることも実感できた。酪農や農業は一つの仕事と捉えていたものが、それぞれ異なった仕事であるのも理解できた。このように、今までは、ざっくりとしたイメージや考えが具体的になり、また体験により気づきと認識に変化があるという実感は、今後の大きな財産になると感じられた。

【執筆担当：倉科 凛】

第3節　実習を踏まえた広報の提案

今後、「青空メロン」を増産し販売量を増やすために、どのような広報戦略があるのかをわれわれは検討した。特にZ世代を中心とした若者をターゲットにした広報を、動画を活用して推進してはどうか、という提案である。

オリジナル動画の作成に際して、マニュアルとして活用したサイトが、「【初心者向け】本当は秘密にしたい『AI映画/アニメの作り方』を大公開！使用ツール：DomoAI, ChatGPT, Suno, Nano-Banana」である。



（出所：https://lilys.ai/ja/notes/creating-ai-animation-20251110/ai-movie-anime-creation-for-beginners）

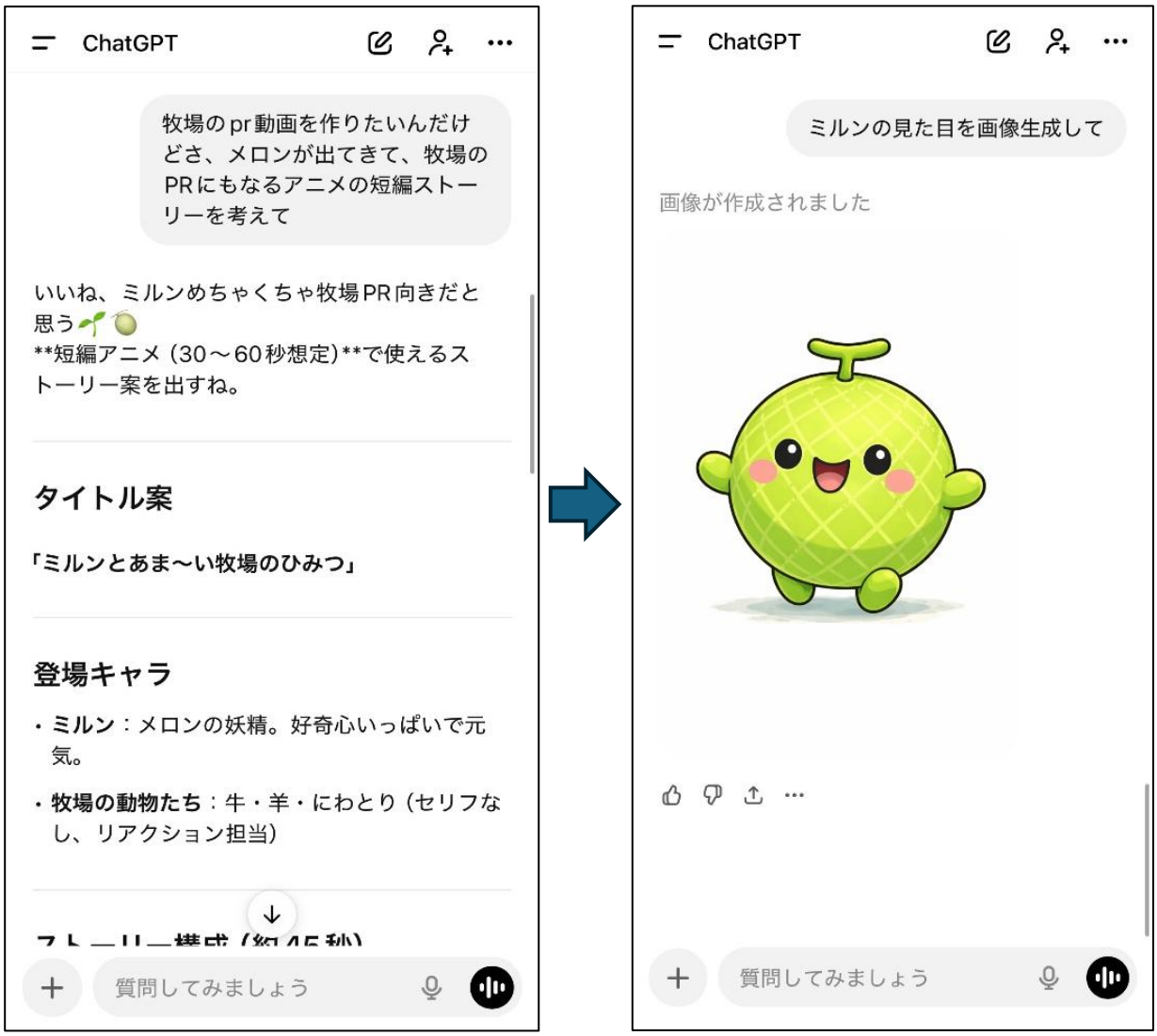
その AI を活用したアニメ動画の作り方の手順は、下の①から⑦である。
①シナリオ作成、②キャラクター作り、③キャラクターシート作り、④シーン作り
⑤セリフ入れ、⑥画像から動画化、⑦セリフと動画の連結

《手順①　シナリオ作成》

使うアプリは、Chat GPT で、Chat GPT に動画のシナリオを作ってもらう。例えば、「メロンが出てきて、牧場の PR にもなるアニメの短編ストーリーを考えて」と指示する。

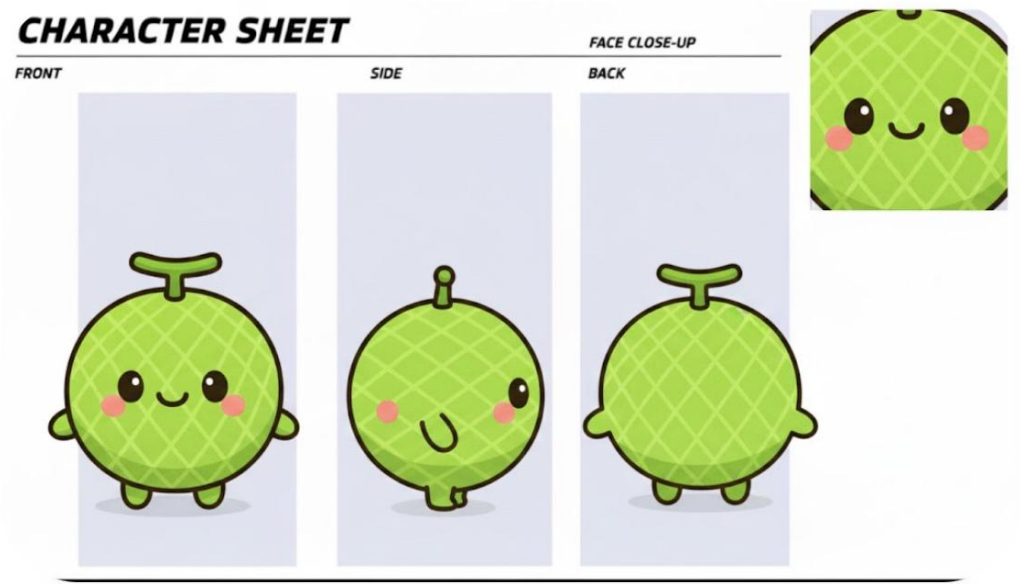
《手順②　キャラクター作り》

Chat GPT に、動画に出てくるキャラクターを画像生成してもらう。①のストーリーから示された「ミルン」というキャラクター案から、ミルンの見た目を提案してもらう。その際、具体的な要望を入力する。例えば、「ミルンをアニメ調にして」と指示する。



《手順③　キャラクターシート作り》

使うアプリは、NANOBANANA(画像生成アプリケーション)である。AI のアニメ作りの難点は、同じキャラクターを作り続けることが困難な点であるが、NANOBANANA はそれを克服できる。手順としては、②で作ったキャラクターとキャラクターシートの画像を添付し、Caracter sheet, three-view, full figure, Close-up of face, white background と入力する。すると、②で作ったキャラクターの前、後ろ、横の外見の画像を作ってくれる。



《手順④　シーン作り》

使うアプリは、Chat GPT で、キャラクターシートを添付し、「走る」、「喜ぶ」などの場面ごとの画像を生成する。



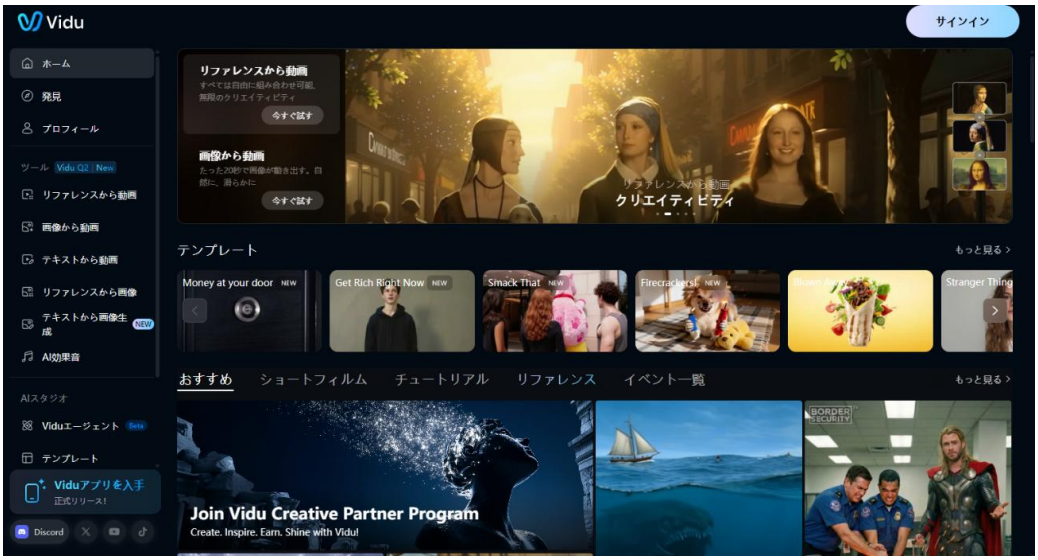


《手順⑤　セリフ入れ》

キャラクターの声に合わせて声をつける。使うアプリは、MiNiMAX Audio　である。まず、MiNiMAX Audio というアプリケーションを開き、Text To Speech を選び、右上の Voice から声色、声の速度、声の大きさなどを選ぶ。その後、セリフを入力し、Generate を選ぶと完成する。

《手順⑥　画像を動画化する》

使うアプリは、Vidu AI である。画像から動画を選び、キャラクターシートと Chat GPT で作った画像を入れ、そのキャラクターにやってほしいことを入力する。そうすると 5 秒で作成され、その続きを違う画像を用いて作成する。





《手順⑦　セリフと動画の連結》

使うアプリは、PowerDirector で、動画を添付し、音声を下に添付する。セリフのタイミングを調整して、完成となる。

【実際に作成したアニメのサンプル画像】







【アニメの作り方についての ZOOM での会議の実施】

会議は、2026 年 1 月 20 日(火)にＺＯＯＭで実施した。内容としては、アニメを作る意味や価値、そしてアニメの作り方について学生側から説明した。特にアニメの作り方についての説明では、アニメを作ったことがない人でも簡単に作れることをお話しした。友夢牧場ではアニメを用いた広報の経験がないため、非常に興味・関心を持っていただいた。

【執筆担当:前中 琉宇】

第3章　友夢牧場の SDGs と広報の方向性

第1節　SDGs の思想と友夢牧場

近年、環境問題や食料問題が深刻化する中で、農業や酪農の在り方、重要性が大きくなっている。特に大規模な牧場は、生産性が高い一方で、環境への負荷が大きいというイメージを持たれやすい。しかし、友夢牧場は大規模な酪農を行いながらも、持続可能な取り組みを実施していた。ここでは、SDGs の視点から友夢牧場の取り組みを考え、どのように持続可能な酪農が実現されているのかについて考察することを目的とする。

SDGs は 17 の目標で構成されている。友夢牧場はホームページにて、友夢牧場は地域循環型かつ環境負荷の少ない牧場運営を実施しており、SDGs の No.7(エネルギーをみんなに そしてクリーンに)と 11(住み続けられるまちづくりを)、そして 12(つくる責任 つかう責任)に該当する取り組みを行っている、と述べている。ここでは、SDGs のどの目標に関連していて、どのような貢献をしているかを、3 つの項目を超えてわれわれなりに考えてみることにする。



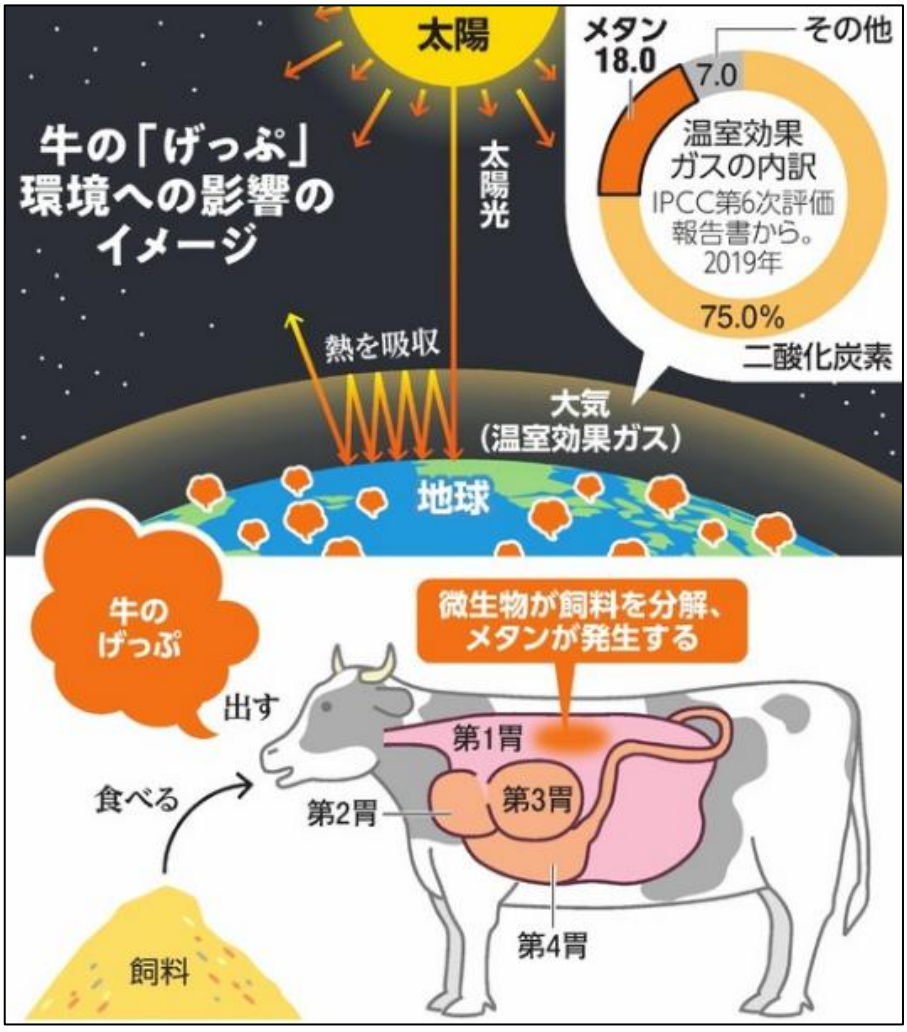
（出所：https://sdgs.media/about/）

(1)SDGs の視点からみた大規模酪農が抱える課題

SDGs の理論から農業や酪農を考えると、友夢牧場のような大規模な牧場にはいくつか

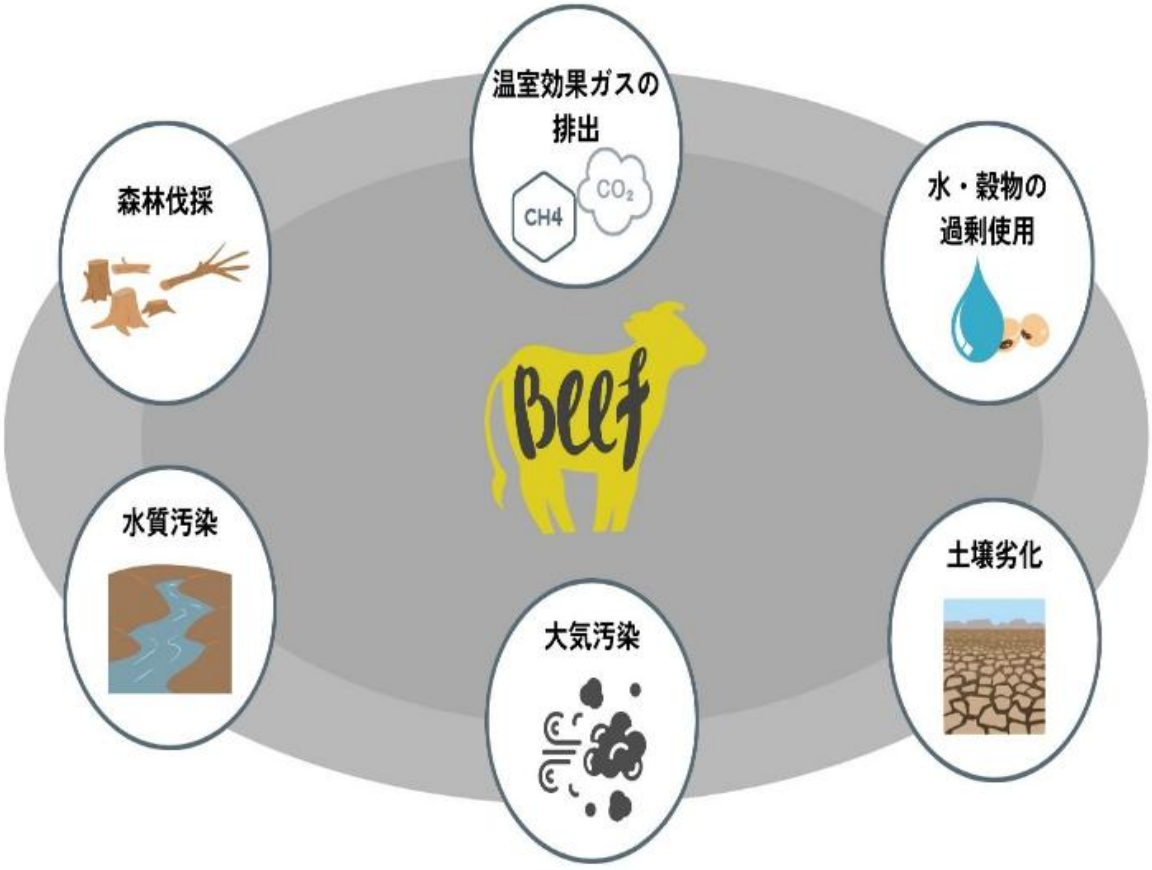
の課題が存在することが考えられる。特に酪農においては、牛の糞尿の処理が大きな問題となりやすく、適切に管理しなければ、土壌や水質への悪影響を及ぼす可能性がある。その他にも牛のゲップや排泄物処理から温室効果ガスも発生する。体重が 600 キログラムある牛の場合、ゲップによって 1 日に 500～600 リットルのメタンガスが放出されるという。そして世界中にはおよそ 15 億頭の牛が存在しており、地球温暖化への影響は計り知れない。また、大量生産を行うことで環境負荷が高まる（土地利用による森林の破壊、水の使用量の多大さによる水資源の枯渇）という懸念点や、効率性を重視するあまり自然との共生が損なわれるという批判も見られる。酪農で働いている人は休みがとれないというところからやりがいを感じづらいという声も聞かれる。このように大規模酪農は持続可能性の観点から否定的に捉えられることも多いが、これらの課題にどのように向き合い、解決していくかが SDGs 達成において重要なカギとなる。

《牛の「げっぷ」の環境への影響イメージ》



（出所：https://www.asahi.com/articles/ASQD24CYLQCHULBH008.html）

《牛肉の生産に伴って生じているさまざまな環境問題》



（出所：https://thinkearthtable.jp/tet-learn-beef-production/）

（2）「飢餓をゼロに」への貢献



SDGs の目標 2 は、すべての人が十分な食料を得られる社会の実現と、持続可能な農業の推進をも目的としている。友夢牧場は、主に牛乳という重要な栄養源を安定的に供給できる点で、この目標に大きく関わっている。2024 年度の出荷乳量は 10,591,485 kgにも及ぶ。その上、牛の糞尿を活用し堆肥として利用するメロンを栽培する取り組みは、酪農と作物生産を結び付けた循環型農業の一例である。さらに、メロンの他にもシャインマスカットやバナナ、コーヒー豆にも挑戦している。これは食料生産を一方向で終わらせず、多様な食を生み出す仕組みが実現しており、将来にわたって安定した食料供給を可能にする点で、目標 2 と深い関係性があると考えることができる。現時点では、酪農から農作物の方向で大量生産を取り組んではいないが、これが成功した場合には SDGs への貢献度は計り知れないものになるだろう。

(3)「エネルギーをみんなに。そしてクリーンに」への貢献



友夢牧場内で栽培されている青空メロンは、友夢牧場内で飼育されている牛の糞を集めて発酵させることで発生するメタンガスを利用して発電し、その発電過程で出る熱エネルギーを使って栽培している。これは SDGs の「７．エネルギーをみんなに そしてクリーンに」に貢献している。メタンガスは本来そのまま放出されると環境に悪影響を与える温室効果ガスだが、エネルギーとして有効活用することで、化石燃料に依存しない再生可能エネルギーとなる。また、発電時に生じる熱も無駄にせず栽培に利用しているため、エネルギー効率が高く、持続可能なエネルギー供給の実現に貢献している。

糞尿からメタンガスが発生 → **可燃性メタンガスを利用し発電機を稼働** → **排熱の熱エネルギーを利用（メロン栽培や酪農施設に）**

(4)「気候変動に具体的な対策を」への貢献



牛の糞から自然に発生するメタンガスは、二酸化炭素よりも温室効果が高く、地球温暖化を進める原因の一つとなっている。この栽培方法では、メタンガスを大気中に放出せず回収し、発電に利用することで温室効果ガスの排出を抑えている。また、再生可能エネルギーを利用することで化石燃料の使用量も削減でき、気候変動の抑制に直接的に貢献する取り組みといえる。このことから青空メロンは、捨てるはずで環境に影響を与える廃棄物を利用し栽培しているため SDGs の「13. 気候変動に具体的な対策を」にも貢献している。に大きく貢献していることがわかる。

《友夢牧場内での消化液の貯蔵》



(5)「つくる責任 つかう責任」への貢献



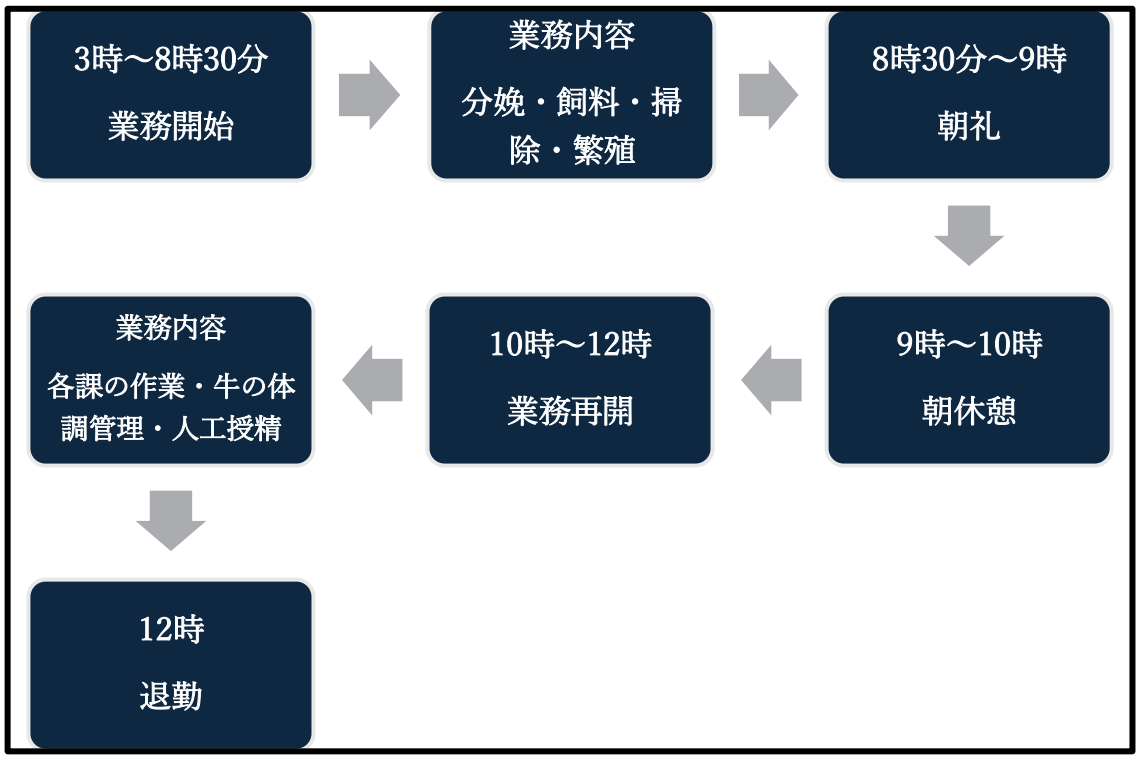
既述の牛の糞を発酵させる時にメタンガスと一緒に発生する消化液も SDGs に関連している。この消化液はリン酸、カリ等の肥料成分を含んでいるため化学肥料の代わりに使用できる。廃棄物として処分せず、資源として循環利用している点で、SDGs「12. つくる責任 つかう責任」に関連して貢献しており、「責任ある生産と消費」を実践している。

(6)「働きがいも経済成長も」への貢献



酪農では、搾乳や飼養管理、飼料生産、堆肥管理などの多様な仕事がある。その上、動物は従業員が体調不良や怪我をしても仕事は待ってはくれない。そのため、畜産業には 365 日の毎日、働く必要があるというイメージがある。しかし、友夢牧場は仕事とプライベートの両立を実現している。これは、「一人ひとりの人生をサポートできる企業に」を思いからきている。これを実現している仕組みは、シフト制とジョブローテンション制度からである。

《友夢牧場のジョブローテーション(早番の場合)》



シフト制は 30 人以上の従業員を早番（3 時～12 時※休憩： 9 時～10 時）遅番（8 時 30 分～19 時※休憩：12 時～14 時）中抜け（3 時～19 時※休憩： 9 時から 14 時）の 3 つ

な区分する。このようにすることで、人材を効果的に割り振れることができ、1 日中働くという事を防いでいる。また中抜けの場合は勤務時間が長くなってしまうため、現在は可能な範囲で早番と遅番での運用に努めている。そして、将来的には早番と遅番のみの運用を目指している。次のジョブローテーション制度は、搾乳・哺育・分娩・繁殖・治療・エサ・除糞などの担当を高頻度で変更する制度のことを指す。ジョブローテーション制度を用いることで従業員全員が様々な仕事ができるため、休みを取りやすい環境が整えられている。さらに牧場全体の様々な仕事にチャレンジしやすくなっている。友夢牧場の年間休日日数は 108 日であり（月 9 日休み、有給休暇を含まない）希望休実現率は 100%である。未経験者でもゼロからスキルを習得できる体制もあり、未経験者も 65%ほどである。その他にも、社宅もあるためベトナムから来た従業員などにも優しい環境となっている。このように、従業員に対して配慮のある環境が整備されており、「働きがいも経済成長も」へも貢献していると言える。

(7)円山動物園との連携による SDGs への貢献

友夢牧場内では、牛の糞を集めて発酵させることで発生するメタンガスを利用して発電し、その発電過程で出る熱エネルギーを使い、メロン以外にもバナナを栽培している。バナナを収穫した後、普通はバナナの葉を廃棄することになるが、その不要になった葉を円山動物園のアジアゾウの飼料として活用している。また円山動物園において希少な動物の飼料を用いた採食行動の教育展示にも活用されることとなった。

《栽培されているバナナ》



（出所：友夢牧場での実習時の撮影写真）

《飼料を提供した時の写真》



（出所：https://www.hokkaidobank.co.jp/company/sustainability/esg_sdgs/info/4329.html）

これは SDGs の目標にいくつか関連している。1 つ目は、「2. 飢餓をゼロに」である。根拠は 2 つあり、まず食料の無駄を減らし、飼料として再利用することで、廃棄資源の有効活用につながっていること、2 点目は持続可能な動物飼育や食料生産の改善といった視点で、農業・食料問題への貢献とみなせることが挙げられる。

そして SDGs の 2 つ目は、「4. 質の高い教育をみんなに」である。これは「円山動物園の教育展示で活用される」ということに関わる。それは、廃棄資源を活かした飼料を教育展示（動物の採食行動）などで役立てることで、来園者に理科的／環境学習の機会を提供できること、そして、一般の人々（特に子ども）が自然や資源循環について学ぶ場にもなり得るため、「4. 質の高い教育をみんなに」に貢献しているのである。



最後に、SDGs の 3 つ目は、「17. パートナーシップで目標を達成しよう」である。これは異なる主体（政府・企業・地域・団体）が協力して目標達成をめざすことで、飼料を提供した友夢牧場、それを受け取り教育展示として活用する丸山動物園、そして、SDGs を CSR として積極的に活動し情報発信をしている北海道銀行との協力があり、「パートナーシップで目標を達成しよう」に貢献しているのである。



【執筆担当：中村 侑一郎、倉科 凛】

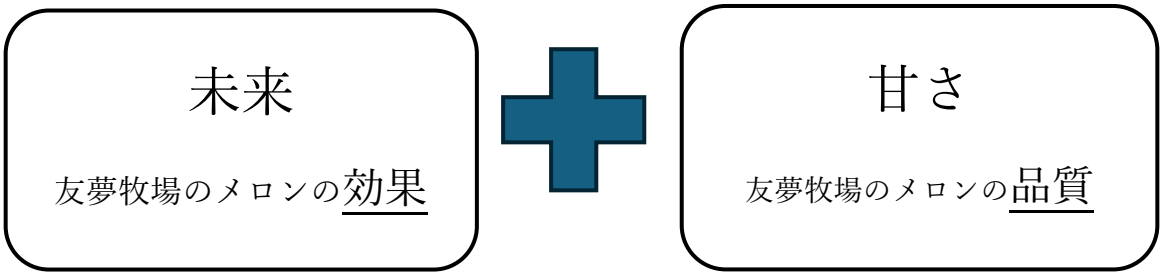
第2節　SDGs を軸とした広報の方向性

友夢牧場では、持続可能な酪農の実践とその価値を社会に伝えるため、メロンの生産だけでなく、その魅力を言葉として表現することにも力を入れている。ここでは、友夢牧場のメロンに対して検討された 3 つのキャッチコピー、「この一玉が、しあわせと持続可能性を育てる。」、「未来につながる甘さ。」、「地球にいいこと、だいたいおいしい。」について、それぞれをキャッチコピーとして選んだ理由、そしてその言葉が生み出す効果や消費者の幸福感の向上との関係、そして牧場が掲げる「酪農の可能性は無限大‼」という理念との関連性について考察していく。

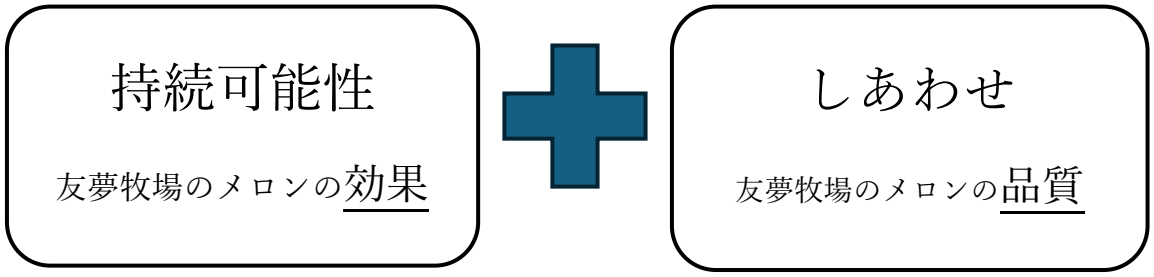
(1)キャッチコピー「未来につながる甘さ」

まず、このキャッチコピーを選んだ理由として挙げられるのは、「メロンのおいしさ」と「牧場の取り組みの価値」を同時に伝えられる点である。メロンにとって「甘さ」は最も分かりやすく、消費者が直感的に魅力を感じる要素である。一方で、友夢牧場のメロンは、牛の糞尿を堆肥として活用する循環型農業によって育てられており、その背景には環境への配

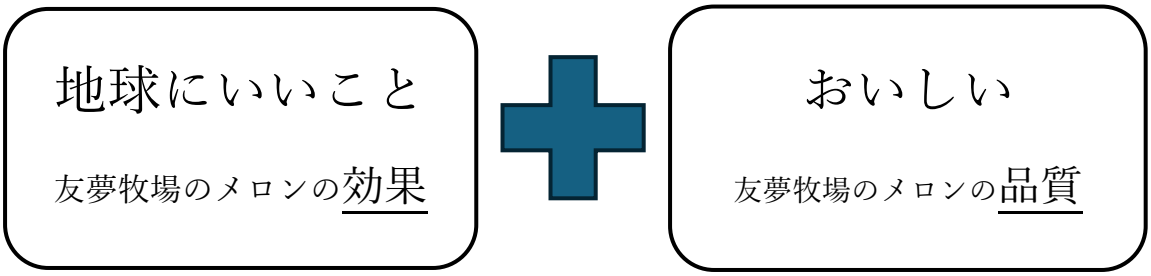
慮や持続可能な酪農への強い意識がある。こうした生産過程の価値は重要であるが、専門的な言葉で説明しなければならない場合、消費者にとっては理解しにくく、距離を感じさせてしまうこともある。そこで、「未来につながる」という表現を用いることで、環境や次世代への配慮、持続可能性といった要素を、難しい言葉を使わずに伝えることが可能となる。「甘さ」という身近な言葉と組み合わせることで、味の魅力と社会的価値を自然に結び付けることができる点が、このキャッチコピーの大きな特徴である。この一文には、メロンの品質だけでなく、友夢牧場が目指す農業の姿勢そのものが込められている。



次に「この一玉が、しあわせと持続可能性を育てる。」というキャッチコピーは、友夢牧場のメロンが持つ価値を、最も包括的に表現する言葉として考案された。メロンは、日常的な食材というよりも、特別感のある果物であり、贈り物やご褒美として選ばれることが多い。そのため、メロン一玉には「うれしい」「幸せ」といった感情が自然と結びつきやすい特徴がある。このコピーでは、そうした感情的価値を「しあわせ」という言葉で素直に表現している。一方で、友夢牧場のメロンは、牛の糞尿を堆肥として活用する循環型農業によって育てられており、その背景には環境負荷の低減や資源循環といった持続可能性への強い意識がある。そこで、「持続可能性を育てる」という表現を加えることで、メロンの生産が未来社会に貢献していることを明確に示した。「育てる」という言葉を用いたのは、しあわせも持続可能性も、一度きりのものではなく、積み重ねによって広がっていく価値であることを伝えるためである。また、「この一玉が」という表現には、消費者の行動に焦点を当てる意図がある。自分が選び、購入したその一玉が、社会や未来に影響を与えているという実感を持ってもらうことで、消費行動に意味を与えることができる。このキャッチコピーは、商品そのものと消費者の行動、そして社会的価値を一文で結び付けることを目的として考案された。



三つ目の「地球にいいこと、だいたいおいしい。」というキャッチコピーは、環境配慮やSDGsに対する堅苦しいイメージをやわらかくするために考案された言葉である。環境に配慮した商品は、「高い」「我慢が必要」「味は二の次」といった先入観を持たれやすい。しかし、友夢牧場のメロンは、循環型酪農によって環境に配慮しながらも、高い品質と甘さを実現している。その事実を、難しい説明ではなく、日常的な言葉で伝えることがこのキャッチコピーの目的である。「だいたいおいしい」という少しくだけた表現には、環境に良いことを特別な努力としてではなく、自然で当たり前の選択として捉えてほしいという思いが込められている。地球にやさしいことは、必ずしも我慢や犠牲を伴うものではなく、むしろ人にとっても心地よく、満足感をもたらすものであるという価値観を提示している。このコピーは、特に若い世代やSDGsに関心はあるものの、行動に移すことにハードルを感じている人々に向けたメッセージ性が強い。環境配慮を「正しさ」ではなく「おいしさ」から伝えることで、持続可能な消費をより身近なものとして感じてもらうことを狙っている。



(2) キャッチコピーによって生まれる効果

■「未来につながる甘さ。」というキャッチコピーが生み出す効果の一つは、消費者が商品を単なる農産物としてではなく、「意味のある選択肢」として捉えられるようになる点である。消費者はメロンを購入する際、価格や見た目、味といった要素を重視することが多いが、このキャッチコピーを通じて、その背景にある取り組みや価値に目を向けるきっかけが生まれる。また、この言葉は、消費者に「自分の行動が未来に影響を与えている」という感覚を与える。メロンを買うという日常的な行為が、環境に配慮した酪農や循環型農業を支えることにつながっていると感じられれば、その行動には新たな意味が生まれる。このような意識は、消費行動に対する満足感を高め、商品への信頼や愛着にもつながっていく。さらに、短く覚えやすい表現であるため、SNSや口コミなどを通じて広がりやすい点も効果として挙げられる。「おいしかった」だけでなく、「未来につながる甘さのメロンだった」という言葉は、友夢牧場の姿勢を含んだメッセージとして他者に伝わりやすく、結果として牧場全体のブランド価値向上にも寄与する。

■「この一玉が、しあわせと持続可能性を育てる。」というキャッチコピーが生み出す最大の効果は、消費者の購買行動に「意味」を与える点にある。消費者はメロンを購入する際、味や価格といった要素だけでなく、「この一玉が何につながっているのか」を意識するよう

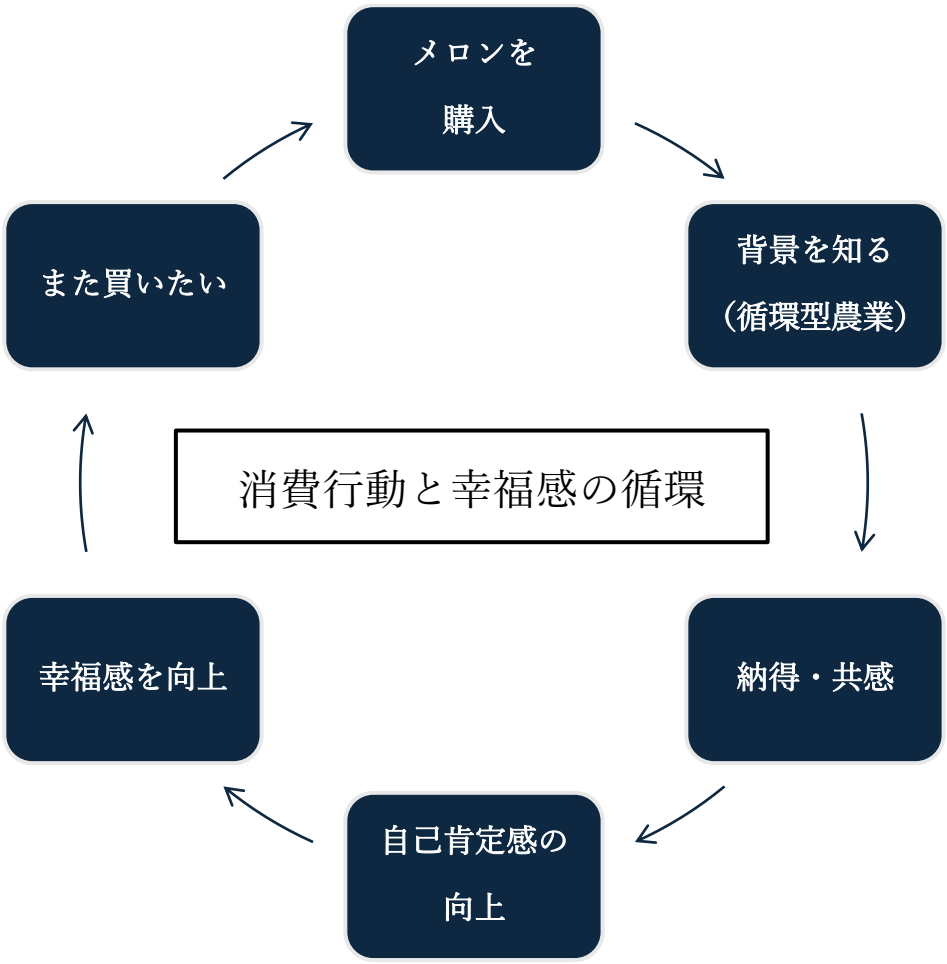
になる。自分が選んだメロンが、環境に配慮した酪農や循環型農業を支えていると理解できたとき、その行動には社会的価値が付加される。また、「しあわせと持続可能性を育てる」という表現は、消費者自身の幸福感にも影響を与える。メロンを食べて感じるおいしさに加え、「良い選択をした」「未来に貢献できた」という感情が重なることで、満足感はより深いものになる。これは一時的な快楽ではなく、記憶に残るポジティブな体験となり、消費者の心の豊かさにつながる。さらに、このキャッチコピーは、贈答用としての価値も高める。贈る側は、「しあわせと持続可能性を届けている」という意識を持つことができ、受け取る側も、その背景を知ることで商品への印象がより良いものとなる。このように、消費者同士の関係性においても、幸福感を広げる効果が期待できる。

■「地球にいいこと、だいたいおいしい。」というキャッチコピーが生み出す効果は、持続可能な消費への心理的ハードルを下げる点にある。環境に配慮した商品を選ぶことが「特別な意識の高い行動」ではなく、「おいしいから選ぶ」という自然な選択として受け取られるようになる。この意識の変化は、消費者が無理なく行動を継続するために重要である。また、このコピーは共感を生みやすく、会話や口コミの中で使われやすい表現である。「地球にいいことって、だいたいおいしいよね」という一言は、SDGs を難しいテーマから日常の話題へと引き寄せる力を持つ。その結果、友夢牧場のメロンは、環境配慮型の商品としてだけでなく、前向きで親しみやすいブランドイメージを確立することができる。さらに、消費者自身にとっても、「おいしいものを選んだ結果、地球にも良かった」という感覚は、自己肯定感を高める要因となる。我慢ではなく満足を伴う選択であるからこそ、消費者は自分の行動を肯定的に受け止め、幸福感を得ることができる。この積み重ねが、持続可能な社会づくりを支える力となっていく。

(3) 消費者の「幸福感の向上」を実現する理由

このキャッチコピーとメロンの存在は、消費者の幸福感の向上とも深く関わっている。幸福感とは、単においしいものを食べたときの一時的な満足だけではなく、「納得して選んだ」「良い行動をした」という心の充実感によっても高められる。友夢牧場のメロンは、甘くておいしいという直接的な価値に加え、その背景にある環境配慮や酪農の循環的な仕組みを知ることで、消費者に安心感と誇りを与える。特に重要なのは、商品を購入することで「自分自身を豊かにしている」という実感である。現代社会では、消費行動が単なる浪費として捉えられることも少なくない。しかし、環境や未来に配慮した商品を選ぶことは、自分の価値観に沿った行動であり、自身の生き方を肯定する行為でもある。友夢牧場のメロンを選ぶことは、「自分はより良い選択をしている」という自己肯定感につながり、精神的な豊かさを生み出す。

このように、キャッチコピーによって生まれる意味づけと、メロンそのものの価値が結び付くことで、消費者は食べることを通じて心の満足を得ることができる。それが結果として「幸福感の向上」を実現しているといえる。



(4)「酪農の可能性は無限大‼」という理念との関連性

友夢牧場が掲げる「酪農の可能性は無限大！！」という理念は、これらのキャッチコピーと深く結びついている。この理念は、酪農を単なる牛乳生産にとどめず、資源循環や地域貢献、消費者の幸福感創出まで含めた広い可能性を見据えたものである。牛の糞尿を堆肥として活用し、メロンを育てる取り組みは、その理念を具体的な形で示している。

キャッチコピーは、この理念を消費者に伝えるための橋渡しの役割を果たしている。「この一玉が、しあわせと持続可能性を育てる。」は、酪農が社会に与える価値を明確に示し、「未来につながる甘さ。」は、その価値を感覚的に伝える。「地球にいいこと、だいたいおいしい。」は、酪農の可能性を楽しく、前向きに表現している。

以上のように、三つのキャッチコピーはそれぞれ異なる役割を持ちながら、共通して友夢牧場の理念を体現している。メロンという農産物を通じて、酪農の可能性を社会へと広げ、消費者の幸福感を高めていく。この取り組みは、「酪農の可能性は無限大！！」という理念が決して抽象的な言葉ではなく、実際の行動と価値創造によって実現されていることを示している。

【執筆担当：倉科　凛】

むすび

本プロジェクトを通じて、友夢牧場が実践する循環型農業・6次産業化の取り組みは、単なる先進的事例にとどまらず、地域社会・環境・人を結び付ける持続可能な価値創出のモデルであることを実践的に学べた。

本プロジェクトにおいては、酪農・農業の現場での実習を通じて、命を預かる責任の重さ、自然や生き物と向き合う厳しさ、そしてその先にある大きなやりがいを学ぶ非常に貴重な体験をさせていただいたことが、すべての出発点であった。机上の学びでは捉えきれなかった「働くことの本質」や「生産の裏側」を、自らの身体で理解したからこそ、青空メロンの価値や友夢牧場の取り組みを、「広報」という形でいかに伝えるべきかを真剣に考えることができた。

本プロジェクトはひとまず区切りを迎えるが、私たちはここで得た学びを一過性の経験で終わらせるのではなく、今後も自律的に考え行動し、他者と協働しながら社会に貢献できるように活かし続けたい。その継続こそが、「札幌学院大学 学生発案プロジェクト」の目的である、「北海道の産業の発展及び北海道の社会文化並びに道民の福祉の向上に貢献し得る人材の育成」、ならびに理念である「自律」「人権」「共生」「協働」、そして建学の精神である「学の自由」「独創的研鑽」「個性の尊重」に合致するもの、だとあらためて考えられるようになった。

そして自分たちに友夢牧場に何かできることがあれば、引き続き取り組んでいきたいと願っている。

今回の学生発案プロジェクトを通じて得た経験と価値観を、それぞれの学修や将来の進路に活かし、学びを社会へと還元できる存在へと成長していくことをここに誓い、本報告書の結びとしたい。

《謝　辞》

本プロジェクトの実施にあたり、多大なるご支援とご協力を賜りました関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

特に、友夢牧場の皆様には、ご多忙の中にもかかわらず、現場実習やヒアリング、広報提案の機会を快く受け入れていただき、貴重な学びの場をご提供いただきました。酪農・農業の現場での体験を通じて、私たちは机上の学びでは得ることのできない多くの気づきと価値観を得ることができました。

また、本プロジェクトを学生発案プロジェクトとして採択していただき、活動の機会を与えてくださった札幌学院大学関係者の皆様、ならびに企画段階からご指導・ご助言をいただいた教員の先生方に、厚く御礼申し上げます。